ベルリンからの手紙・一八八八年

——失意の外務官僚、斎藤修一郎小伝——

稲野　強

（一）はじめに

今、私の手元に二通の英文の手紙の写しがある。一通は一八八八（明治二一）年六月四日、他の一通は同年六月一三日、いずれもベルリンからハンガリーのブダペシュトに宛てられたものである。発送人はベルリン在住の斎藤修一郎、受取人はハンガリーのブダペシュト大学教員アールミン・ヴァームベーリ[1]（Ármin Vámbéry, 1832—1911）である。

私は一九八九年四月から約一年間主としてオーストリアのウィーン大学日本学研究所の客員研究員として、日露戦争（一九〇四—〇五）当時オーストリア・ハンガリー帝国の日本公使館で行われていた情報収集活動および宣伝活動について調査していた。その目的は当時のオーストリア＝ハンガリー帝国駐箚日本全権公使牧野伸顕の対ロシア宣伝活動に焦点を当て、これまでもっぱら戦争当事国の日本、ロシアあるいは親日的なイギリス、アメリカを中心に進められてきた戦時外交史研究を中・東欧を視野に入れることによって側面から補強することにあった。その間の調査で明らかになったのは牧野の求めに応じて反露宣伝活動に一役買ったヨーロッパ人が存在するということであった。その人物が当時ヨーロッパ中にその名を知られていたハンガリー出身の旅行家で東洋学者、上述のヴァームベーリであった。ヴァームベーリは牧野の求めに応じて反ロシア宣伝用の小冊子『黄禍』[2]を書いて、牧野の要望に応えたのである。

牧野がヴァームベーリに小冊子の執筆を依頼した過程については私はすでに小論を上梓したが、[3]この二人の人物の出会いの契機にはなお不明の部分が多く、その点を解明すべく折りを見て、ヴァームベーリの生国ハンガリーを訪れた。予備調査的性格のためもあって成果は乏しく、残念ながら例えばブダペシュトのセーチェーニ図書館に保存されているヴァームベーリ関係の書簡類のリストでもハンガリー科学アカデミー東洋学研究所附属文書館のヴァームベーリの書簡類のリストでもヴァームベーリと牧野との交流を知る手掛かりとなる書簡類等は見つけ出せなかった。その代わり上述の文書館で偶然見つけたのが本稿で紹介することになる斎藤修一郎からヴァームベーリに当てた二通の手紙（ペン書き）である。

当該研究の対象である日露戦争の一六年前にすでに斎藤が、たとえ手紙という手段ではあったとしても、ヴァームベーリに接触していたという事実[4]は何故斎藤がヴァームベーリに手紙を書いたのか、そもそもこの斎藤なる人物はどのような経歴・思想の持ち主なのか、等を解明する興味を私に起こさせた。というのはこの両者の接触は、少なくとも日露戦争に至る一貫した日本の対露外交政策の延長線上で行われたことは想像するに難くないからであった。そこで本稿ではまずなによりも、これまで歴史研究者の間で全く触れられてこなかった斎藤の

生涯を素描し、彼とヴァームベーリとの出会いを探る一助とし、次に史料紹介の意味から斎藤からヴァームベーリに宛てた手紙二通を訳出することを課題とする。

すでに拙稿の「『反露主義者』アールミン・ヴァームベーリ」[5]では、本研究の中心課題である日露戦争時における牧野とヴァームベーリの関係を探ることから視野をヴァームベーリと接触した日本人知識人にまで広げ、その結果白鳥庫吉、徳富蘇峰への彼の学問的・思想的影響の一端を垣間見ることができた。本稿で斎藤の生涯をあえてとりあげるのは、日本人のヴァームベーリ像を多面的にとらえる準備作業と位置付けることができる、と考えているからである。ただし斎藤は、地域研究者のほんの一部にその名を知られる程度で、今日ほとんど忘れ去られた人物であるといってよく、残された資料も乏しく、断片的である。従って彼の生涯についても不明な点が多いことから、本稿も、中間報告的な域を出ないものであることをあらかじめお断りしておく。

（二）斎藤修一郎の生涯

斎藤の生涯を、彼の郷里の福井県武生市に残る郷土誌、同僚・後輩や親類縁者の談話の記録、公文書、自身が口述した回想録、新聞記事等[6]を手掛かりに再構成することによって、これまで理解できたことは、彼が少壮の外務官僚として、人脈にも恵まれ、同僚に先んじ、二〇歳代後半にはすでに草創期の日本外交で重要な役割を演じ、将来の外務省の頂点に立つ人物と目されながら、完全に花開く一歩手前で挫折した人物であったということである。その挫折感の大きさは、彼が三〇歳代後半にすでに自分の人生を「余生」としてとらえていることからも理解される。彼の人生は、まるで五分咲きの桜が突風に吹かれて散ってしまったようであった。実はベルリンからブダペシュトに手紙を送った一八八八年は彼にとって外務官僚として勤務したの最後の年に当っていたことになる。

さてそこで彼の生涯で「一八八八年」の位置関係を一瞥するために簡単な年譜を示しておこう。

［略年譜］

一八五五（安政二）年七月一二日、越前武生藩（現福井県武生市）で生まれる（生家は旧武生藩本陣、現住所は在市内天王町四の六、亳摂寺武生別院）、父、府中眼科医斎藤策順、母、鯖江藤田氏の娘、修一郎はその長男。二歳の時、母は実家に戻り、三歳で父に死別、養兄石渡寛輔の死後、祖母および叔父大雲嵐渓の手で育つ。

一八六七（慶応三）藩主の面前で経書を講義。藩制改革。議政所設置。修一郎、学力品行優秀により議政所総裁より賞与を受ける。

一八六八（慶応四、明治元年）、武生藩、福井藩に吸収さる。福井藩に反抗した「武生事件」起こる。

一八六九（明治二）、修一郎「八人扶持、眼医、句読師」に任ぜられる（「武生藩御給帳」[7]より）。

福井藩の指定選抜で沼津兵学校附属部（西周主宰）で英語・漢文・数学を学ぶ（福井藩の旧武生藩に対する融和策）（一八七〇）。後見人の叔父大雲、「武生事件」の首謀者とされ逮捕後、獄死。

一八七〇（明治三）、福井藩選出の貢進生として大学南校（東京大学の前身）に留学。

一八七三（明治六）開成学校開業式の天覧科目で「法律起源」を講述する。

一八七五（明治八）、七月、政府派遣の第一回官費留学生としてボストン大学に学ぶ。他に小村寿太郎、三浦（鳩山）和夫らも留学。滞米中、小説家エドワード・グリーと共に為永春水の『いろは文庫』を翻訳出版。

一八八〇（明治一三）、帰国。当初新聞記者を志すも、同郷の渡辺洪基（一八四七―一九〇二）の紹介で井上馨（一八三五―一九一五）を

知り、外務権少書記官に出仕。公信局通商課長。
一八八一（明治一四）、外務卿付書記（秘書）兼務。
一八八二（明治一五）、朝鮮事務掛（壬午事変の善後策のために井上外務卿に従って朝鮮に渡る）。
一八八三（明治一六）、外務少書記官、外務卿付書記官。
一八八四（明治一七）、外務権大書記官。特派全権大使井上馨に随行し、朝鮮に渡る。
一八八五（明治一八）、条約改正掛。翻訳局長兼務。外務大臣官房長心得。
一八八六（明治一九）、外務大臣秘書官。総務局政務課長兼務。第一回条約改正会議書記局局長。「機密漏洩事件」発生。斎藤辞任。一一月三〇日、無任所公使館参事官として欧米に派遣される。
一八八八（明治二一）、六月、ベルリンよりヴァームベーリに書簡を送る。一〇月六日帰国。外務省を辞任し、井上馨農商務大臣の下に秘書官兼商工局長。
一八九〇（明治二三）、武生郷友会（一八八七年発足）の副会頭に選出される。
一八九三（明治二六）、農商務次官（高等官二等）。
一八九四（明治二七）、株式取引所に絡む「官紀振粛問題」（農商務省の汚職問題）で依願退職。
その後、韓国政府農商務顧問、中国鉄道株式会社取締役、中外商業新報社長、米穀取引所理事長、皇国殖民株式会社専務取締役など歴任。
一八九九（明治三二）、帝国党創設に参画。
一九〇七（明治四〇）、一〇月、アメリカに渡る。
一九〇八（明治四一）、自伝『懐旧談』をサンフランシスコで口述筆記。[8]
一九一〇（明治四三）、五月七日、死去（五六歳）。

以上の年譜からほぼ推測されるように、斎藤は、少年の頃徳川幕府の崩壊過程を、「武生事件」を通して身をもって体験したのを出発点とし、揺籃期の近代日本の外交的側面の基礎づくりに参画し、明治期全体を急いで通り抜けたような生涯を送った。その一生は、アメリカ留学までの修業時代、最も華やかな活動をした外務省時代、官に寄りながらかつ相応の出世はしたが、もはや才能の腕をもがれたような農商務省時代、官を辞して「天下った」民間時代の四期に大別されるであろう。彼の決して長くはない生涯で、最もその才能を発揮したのが、外務省時代であり、ヴァームベーリとの接触もこの期に行なわれたことから、本稿の中心もその時期にならざるを得ない。

（三）修業時代

斎藤が生まれ育った武生は福井市の周辺に位置し、今日でこそ田園地帯の中にぽっかりと浮かんだような小さな一地方都市であるが、鎌倉時代から江戸時代には府中とよばれ、政治の中心地であった。江戸時代、「府中藩は二万三千石の小藩で、しかも藩主本多家は、福井松平家の附家老格で、将軍直属の家臣でないため、大名ではなかった。そのため何事によらず福井藩から圧制を受けることが多く、また、府中藩士は福井藩士から陪臣と蔑まれていた。」また一方、隣接する鯖江藩は四万石の大名ではあったが、藩祖の間部詮房が能役者であったのを六代将軍家宣に取り立てられたために、府中藩士は鯖江藩を「成り上がり者」と軽蔑していた。こうして近隣の福井・鯖江両藩に対する抵抗・反発・対抗意識から、府中藩士はかえって武芸・学問を磨く、負けず嫌いの気性を自然と身につけていった。[9] 修業時代の斎藤の中に明らかに武生の出身者としての自負心が至るところで見られるのも、こうした強力な一種の地域愛郷主義が武生に充満していた表れであった。斎藤家は代々武生藩主本多家の藩医を勤めていた家柄で、修一郎の父も京都に出て、日野鼎哉に医学を学び、藩医になったが、三六才

で死亡した。斎藤家の断絶を恐れた親族は藩主に働きかけて、当時大坂の適々塾で福沢諭吉に次いで塾頭をしていた親類の石渡寛輔を藩命によって戻させ、修一郎の義兄とし、斎藤家を守った。医学教育を受けたことがない修一郎が若干一二才で藩から眼科医の身分を貰ったのも家系保持のために他ならなかった。

修一郎が、福井藩と対立する武生藩にとっていかに誉れ高い存在であったかを証明するためには、彼が、当時英語教育に非常に力を入れていた西周の主宰する沼津兵学校に派遣され、さらに福井藩の貢進生として東京の大学南校に留学したことを挙げれば十分であろう。

開設されたばかりの大学南校には当時各地の選りすぐった秀才が集まっていたといわれているが、[10]確かに斎藤と同期の学生の多くは次代の日本を担うはずの人物であった点は動かしようのない事実であった。小村寿太郎、三浦（鳩山）和夫、杉浦重剛等々豊かな人材を輩出したことがそれを裏づけている。斎藤はどうやらその中でも知力、統率力、指導力が抜きんでていたようである。彼の学力は、一八七三（明治六）年一〇月九日の開成学校開業式の「天覧科目」で彼が英法学生徒の代表に選ばれ「法律起源を講述」したことからも分かる。[11]ただ彼がいわゆる青白い秀才でなかったことは、学業成績が常に上位であった訳ではなく、また彼にまつわる数々のエピソードが物語っている。それらをまとめて斎藤の当時の性格を判断してみると、そのいずれもが、自信過剰、スケールの大きさ、小事に拘らない豪放磊落さ、物事を強引に処理しようとする押しの強さ、義侠心に富んだ親分肌を表わしている。ややもすると武士階級のエリート意識むきだしの性格や小藩出身の気負いが、露骨に表われていると見えなくもないが、それが彼の出世を早めたし、逆に挫折をも早めたのである。

大学南校時代の特筆すべきエピソードは、「海外留学運動」に関するものである。[12]学生たちは勉学が進むにつれて、先進諸国の大学で研鑽を積む必要性を認識していった。その情熱に駆られた者たち五人が「五人組」と称し、彼らが中心になって文部省に海外留学の許可を求める運動を始めたのである。その中心に斎藤がいた。彼は「建白書」を書き、その運動は功を奏し、文部省に留学生制度をつくらせるに至った。ところが運動の推進者であったにもかかわらず、彼は成績順で留学生の選に漏れてしまった。文部省の決定に腹を立てた彼は、すでに留学が決まっていた三浦（鳩山）和夫の代わりに自分を行かせるように当局に直談判し、対応に苦慮した文部省は、留学生の枠を一名増やすことによって、斎藤を留学生の列に加えたという。[13]後に斎藤は鳩山にその件を告白し、許しを乞うている。[14]鳩山は大学南校での成績は常に首位で留学していたハーヴァード大学で学位をとっていた勉強家であったにもかかわらず、帰国後職に恵まれなかった。斎藤は、その彼に就職を斡旋し、[15]友情を確認している。面倒見のよさと言えば、小村寿太郎の就職を斡旋したのも斎藤であったし、また後に述べることになるが原敬が外務省に入るに際して尽力したのも斎藤で、両者は終生変わらぬ友情を保った。このように斎藤に関する多くのエピソードに共通しているのは、彼の大胆さ、押しの強さ、決断の速さ、潔さ、人情の厚さであり、沈着、慎重さといった資質は彼には備わっていなかったようである。[16]

（四）外務省時代

一八八〇年、五年間のアメリカ留学から二五才で帰ってきた斎藤は、自伝によれば、アメリカの「物質的共和的思想」に触れたために、新聞記者になって、理想の新聞・雑誌を発行してみたかったようだが、当時資金を出してくれるあてもなく、さらに官費留学生は帰国後、一定期間役人生活をする義務を帯びていたこともあって、同郷武生の先輩で当時外務省書記官であった渡辺洪基（後に東京府知事、東京帝国大学総長、オーストリア＝ハンガリー全権公使、貴族員議員）の紹介で、長州閥の外務卿（一八八五年に外務大臣と改称）井上馨に会い、

外交畑に進んだ。[17] 彼が初めて勤務したのは通商課であったが、斎藤の自伝によれば、「その時分のことであるから通商と云ひ条、多寡の知れたものであって、領事館はまだ僅に十ヶ所程しか無い。で、何等用事もなく、只領事館員の進退位の機密信を一日に一つ三日に一つ書く位のもので、他に梅暦やら八犬伝やらと云ふやうな稗史野乗を擔ぎ込んで、外務省とは甚だ縁の遠いものを机の上で読んで、一年ばかりは月俸を貰って暮らしていた。[18]」

西洋文明の圧倒的な強さに触れた留学帰りで、しかも国家建設に燃える自信に満ちた青年にとって決してこうした部局は魅力あるものではなかったが、一八八二年四月に外務省付書記をしていた園田孝吉がロンドンに領事として赴任し、その後任に斎藤を推奨したのが転機になった。それによって彼は直接井上の下で働くことになったからである。彼は権勢を誇る長州閥の井上馨のバックアップで外務省における出世階段を一歩一歩確実に登っていった（前記の年譜を参照のこと）。[19] これに対して井上に対する斎藤の忠誠心は生涯変わるところがなく、それはあたかも封建社会の主従関係さながらであった。[20] 一方、彼は井上の期待に応え、井上の懐刀と言ってよい働きをしたが、その中でも特筆されることは、一八八二年に壬午事変（壬午軍乱、京城事変）の善後策のために井上が朝鮮に派遣された際に彼に従って朝鮮に渡り、その時の斎藤の行動によって、井上の信頼を確保した点と、井上外交の最重要課題である条約改正審議の舞台裏でのお膳立てに見せた斎藤の手腕であった。

周知の通り壬午事変は、一八八二年七月二三日に、朝鮮の首都、漢城（ソウル）で起きた軍人暴動で、日本の指導によって軍制改革などを進めんとした閔妃政権に対して、不満をもつ守旧派の軍人たちが政権転覆を図る大院君一派にそそのかされて日本公使館を襲撃した。[21] この事件で洋式軍隊の訓練に当っていた軍事教官、陸軍工兵少尉堀本礼造が殺害され、花房義質弁理公使も辛うじて公使館を脱出できた。彼は、その後イギリス艦に救助され、七月二九日に長崎に到着し、井上外務京の指揮を仰ぐことになったのである。この事件の展開についてここで詳細に語る余裕がないし、斎藤のその間の活躍は今のところ講談師で後に代議士になる伊藤痴遊の語るエピソード以外に知る手立てはない。[22] そこであえて痴遊の説に従えば、朝鮮政府の遅延策に遭い、対応に苦慮していた井上に断りなく、斎藤が朝鮮代表者との交渉を打切って仁川に引揚げることに決めたということである。井上は、単なる一書記官に過ぎない斎藤のこの越権行為に立腹したが、結局は斎藤の思惑通り仁川に引揚げることになった。斎藤のこの決断は、朝鮮側が謝罪をし、交渉に応じると踏んでのことで、中国側の動きをあらかじめ察知していたことを物語っている（この日、清国の馬建忠が京城に入り、大院君を天津に拉致した）。それについて斎藤は自伝の中でも、何にも語っていないが、

「一五年花房公使朝鮮京城の遭難善後策の為に井上外務卿馬関出張の随行として此の父（斎藤のこと―引用者）御供せし以来、如何なる因縁か知らぬが（傍点―引用者）深く井上伯の信用を得て、…」[23]

という一件さりげない記述に触れると、斎藤が相応の活躍をし、これを契機に井上に一目置かれる存在になったことが窺い知れる。彼は翌年、外務少書記官に昇格し、月給もこれまでの一〇〇円から一五〇円に大幅にあがった。

さて斎藤が井上外交を陰から支え、心血を注いで取り組んだのが、条約改正の案文作りであった。一八七一年に「条約改正の議」があって、各国の条約改正の意志を打診するために岩倉使節団が米欧に派遣されたが、日本側は欧米各国の巧妙な外交政策に翻弄され続け、長年その対応に苦慮していた。しかし井上外務卿が一八八四年八月四日に条約改正に関する覚書きを各国公使に交付したところ、各国公使は大体賛成の意思を表明したために、ようやく改正条約案の起草に着手することができたのである。各省から委員が出され準備委員会のような組織がつくられたが、当時外務大臣秘書官の斎藤も外務省権少書記官栗野慎一郎、外務省顧問アメリカ人デニソン（H. W. Denison）、司法

省権少書記官横田国臣、参事院議官黒田綱彦と共にその委員に選ばれた。[24] 条約改正の案文作成が極秘裡に行われたことについて、井上は次のように回想している。[25]

「当時条約改正について世間が騒がしかったので、案の内容が未だ発表すべき時期に至らぬ前に漏洩して、改正談判に悪結果を齎すことを恐れ、起草関係者一同は窃に箱根に赴き、旅館福住を借切って一切外来者と絶ち、曩の覚書に基づいて改正条約案の起草に従った。」

といわれるように、改正案が仮にその協議過程で多少でも漏れるようなことがあれば、外交的駆引きは果たせなくなる。日本側としても時には戦術上、相手の出方を探るために譲歩せねばならない場合がある。従って、秘密理に案文作成作業が進められるのは当然であった。

一八八五年四月に全文二六条より成る改正条約案が作成され、それに基づいて一八八六年五月一日に、これまで諸外国との間で行われてきた予備会議（「予会議」）に代わって井上外務大臣の下で初めて正式な条約改正会議が外務省で開催されることになった。

ところでこの会議にたいする期待感を当日の『東京日日新聞』は次のように表明している。[26]

「……ああこの日や、我が国の志士論客が、数年前より筆に口に痛論し激論し、慨歎大息これに次ぐに泣涕を以ってしたるまでの条約改正、税権恢復、治外法権漸次廃止の萌芽を、我が日本の国土上に開拓したるの初日なり。その秋実のいかんは今より図り知るあたわざれども、この明治一九年五月一日という年月日は、我が国外交の歴史上に永く存在して忘るべからざるの日なるべし。」

会議の用語は英語またはフランス語とし、日本、イギリス、アメリカ、オーストリア＝ハンガリー、オランダ、ポルトガルの各委員は英語を使用し、その他の委員はフランス語を使用することになった。外国団首席であるフランス公使シェンキウィッツ（J. A. Sienkiewicz）の発議により井上が会頭に、外務次官の青木周蔵が会頭代理に推薦され、斎藤は条約改正会議書記局書記長に任ぜられた。彼はフランス公使館翻訳官フオサリウ、イギリス公使館書記官ガビンス（J. H. Gubbins）、外務省のお雇い外国人のドイツ人シーボルト（A. Siebolt）、アメリカ人スチーブンス（D. W. Stevens）と共に書記局を構成し、会議の議事録の作成に当たった。[27] 斎藤は従って、当然会議の裏方の最重要ポストにいたのであるから、会議の全容は明確に把握していた訳である。

（五）「機密漏洩事件」発生

第一回目の会議が五月一日に開催されたのに引き続いて、第二回目が五月二二日、第七回目が六月二九日にと順次開かれた後、七月初めに「暑中休暇」として休会になった。どうやらこの休暇中に改正案の内容が外部に漏れたらしい。

いつの時点で、どのような経路で会議の関係者が「機密漏洩」の事実を知ったかという点については、この事件を詳しく追うだけの余裕がない現在の私には不明である。だが、恐らく八月二八日の『タイムズ』の社説と同日の「日本における条約交渉」（東京発、七月二一日付）という記事[28]をイギリスの日本公使館の館員あたりが読んで、その旨を至急電や別の手段で会議の関係者に緊急に伝えたか、あるいは日本で関係者が読んで事態の深刻さを理解したかどちらかであろう。

さらにこの事件で最も重要なことだと思うが、一体誰が、どのような目的で極秘であるはずの会議の内容を外部に漏らしたかという問題がある。だが会議の関係者が一様に沈黙をしたままであるために、私見によれば、その問題は闇に包まれたままである。会議の事務局の中心にいて事の顛末を誰よりも熟知しているはずの斎藤からして、事件の核心に触れることは避けている。この事件が彼の運命を変えてしまったといってもよいほどだが、自伝の中でも他の所では饒舌とも思える程の彼が事件の内容についてはほとんど語っていない。それは自

伝の編者に次のように語らせていることからもわかる。

「此の明治十一九年十月中旬某日の午後一時より以後約十日間（傍点―引用者）には斎藤先生が一身上に就きて多大なる関係ある事情を湧生したのみならず、大は内閣の興廃にも関する大事件を発生し来り、その間当局大臣たる井上伯は勿論、伊藤、山縣、松方諸公当代の傑物深く国家の為に憂慮せられ、遂に斎藤先生の献身的微哀独り漸く外交上の一大難関を解排したるなり。今此等詳細当面の事実と事情とを先生が家庭の書斎に於て水入らずの児輩に訓へたるが如く、此所にも又此を読者の眼前に披瀝されたきは編者大に希望に堪へざる所なれども、事や是国家に関する主要の秘密事件にして軽々しく此を口にし筆にすべきにあらず。故に先生此を許容したまはず。……」[29]

この編者の記述によれば、政府首脳が対応に苦慮していたが、その解決には斎藤の並々ならぬ力が与かっていた。そして「…十月中旬某日の午後一時より以後約十日間…」が斎藤の運命を決した時期だという。ここでいう「十月中旬某日」とは一〇月二〇日のことであるが、実はこの日は六月二九日以来開かれなかった第八回目の交渉会議の日で、午後一時から開くことになっていたのである（議事録によると会議は午後二時から開かれている―引用者）。[30] ところがその日会議に臨もうとした井上、青木、斎藤ら会議の関係者はどうやらこの「機密漏洩」が自分たちの努力で鎮静化し、一様に安堵していたようである。その雰囲気を斎藤の冗談を交えた次のような発言が臨場感よく伝えてくれている。彼はこう言う。

「国家の一大事たる条約改正案件に関し一大事件が起こりたるのであるから、問題は頗る大事となった。其所で青木次官がその衝に当って必死と鎮撫策に努めた結果、いよいよ休会後第一回の会議を十月中旬の或日午後一時から開くと云ふことになつて丁度昼食時刻となつた。……井上伯は口を開いて何うだらう青木、もう大丈夫鎮撫出来たらうかと訊ねられる。我々も口々に如何です青木さん、鎮撫は大丈夫出来ませうかと云ふ。青木次官はもう大丈夫だと思ふと云ふ。そこで余は滑稽半分に笑ひながら愈々事面倒と相成らば仕方ありません、それ、その時には一つ此の私が犠牲になって欧羅巴へでも流されませうと斯う云つて一同顔を見合はせて笑つたことであつたが……」[31]

この時点で斎藤もまさか冗談が現実になるとは夢にも思っていなかったようである。

しかし「機密漏洩」の事実が世間に知られたのはその日、一〇月二〇日の会議で、オランダ＝スウェーデン＝ノルウェー＝デンマーク全権委員のファン・デル・ポット（J. J. van der Pot）が自分の意見を文書にしたものを読んだことに端を発していた。すなわち、彼は次のような内容を述べて、出席者を驚かしたのである。[32]

五月一日の会議の「会議録第一号」には「第二本会の討議及本会に関する書類は全く秘密とせんことを会頭発議せられ会員も亦一統此に同意せり」とあるため、自分はこのことを厳然と守り通した。だから祖国では自分が全てのことを秘密にしているということで、「余輩を誹毀し甚だしきは余輩を侮辱」したが、自分は断固秘守したことは誓ってよい。しかしながら、八月二八日の『タイムズ』紙は七月二一日付の東京特派員の記事を載せていた。それはこの会議の内容を詳しく記述している。だがその記事が詳細なためその出所を探るのは難しくない。

そしてポットは、このことはこの会議の尊厳を傷付け、機密が漏洩したのははっきりしているので、日本政府の代表である日本人委員は、会議の尊厳を保ち、秘密を守るために、どのような対策を立ててきたのか、今後どのような対策を立てる積もりか、さらに犯人が見つかった場合、その背信行為に対してどのような処罰を考えているのか、教えてほしいと、井上に迫った。[33]

このポットの発言がどのような経路を通ってか、またしても外部に漏れ、会議の秘密は守られなかったようである。すなわち、翌々日の一〇月二二日付けの『東京日日新聞』の記事「日本条約改正論」の中で機密漏洩問題が早速取り上げられるに及んで事は表面化してしまっ

たのである。新聞記事は、「機密漏洩」の疑いがあることを、新聞社が直接『タイムズ』の記事を読んで、「発見した」ように書かれているが、記事の出方のタイミングからすると会議でのポットの発言を伝え聞いたと考えたほうが自然である。

さて、『東京日日』の記事はこうである。

「条約改正の会議はさる廿日を以て第八回の会議に及ばれたるは世上に隠れなき所たり但し其会議の模様は素寄りが以降機密に属するを以て吾曹と雖ども之を探知するに由なく仮令ひ其の端倪を霹靂の間に弁ずるを得たりとて容易に吐露すべきに非ざれば是迄は謹で沈黙の自由を占めたり。然に今や『英国タイムズ新聞』を閲するに八月廿八日の紙上には日本条約改正に関したる東京の通信を載せ且その社説に於て評論を下したる所あれば既に欧米各国に伝播して復た機密中のものに非ざるなり斬く公共の報道たる以上に吾曹これを訳出して公衆の観に供するも亦敢て不足なかるべしと信ずるなり。[34]」

さらに『東京日日新聞』は『タイムズ』がいかに世界的に権威のある新聞で、従ってその特派員の記事がいかに信憑性の高いものであるかを読者に喚起するために、こう続ける。

「彼の『タイムズ』は世界にて第一等に列するの新聞紙にして其の中外の政治問題に関しては尤も確実の報道を為すものたるは夙に知るところなるが其の名は果して虚ならず『タイムズ』通信者が本年七月廿一日東京発信を以て『タイムズ』へ書送した者を通読するに其の事実を明識せるの周到なるは吾曹をして驚嘆せしむるに余ありとす其の報道の要略に云く……」

新聞紙上に載ったことにより「機密漏洩」は世間の知るところとなり、[35]新たな展開を迎えた。すなわちこの事件は、一時期成功したかに見えた井上外交が引き続き起こる外交上の不手際によって結局は失敗に終わる端緒をなした。というのはその後、条約改正交渉にとってきわめて困難な事態が発生したからである。例えば、ほぼ時を同じくして（一〇月二四日）に起こったイギリス船ノルマントン（Normanton）号の紀州沖での沈没事故もその一つであった。この事故ではイギリス人乗組員二七人はボートで脱出したが、日本人乗客二三人が全員溺死した。だが一二月八日イギリスの領事裁判所は船長のドレーク（J. W. Drake）に禁固三か月を言い渡したに過ぎなかったために、世論は一斉にイギリスの行なった領事裁判の不当性を非難した。それを契機に自由民権論者や井上の政敵、彼の極端な欧化主義を批判していた国粋主義者たちが条約改正反対運動を起こし、それが後に谷干城やボアソナード（G. Boissonade）の反対論（彼らの文書が秘密裡に出版され、巷に広まり、反対勢力を勢いづかせた）と結び付き、さらに改正条約案の中にある外国人裁判官任用に対する世論の轟々たる非難も加わって、やがて井上を外相辞任に追い込むことになったのである。

さて、この「機密漏洩事件」自体は結果的には斎藤に全責任を負わせて落着することになった。そのために井上と青木は、辞任を免れることができた訳である。自伝の中で斎藤は、今後の自分の身の振り方についていかにも斎藤らしい豪気さを失わずに、井上と青木に述べている。井上に対する滅私奉公的な彼の忠誠心が、やや講談調の自伝の記述から窺われるのである。すなわち斎藤は、事件発覚直後に井上の屋敷で今後の自分の身の処し方について井上に相談した。自分は、外国に出たいので、三年ほど留守家族を養育してくれるように、[36]と。

「私は此儘丸裸身にて亜米利加へ渡、一卜稼ぎ試みまして目出度帰朝致したい考で御座いますと斯ういう意を申し出た。」

それに対して井上はこう応えたという。

「成程それも或は得策かも知れぬ、マア、急ぐには及ばぬ、緩くりと考へて見て呉れ」

井上は斎藤が外国に行った場合には留守家族のための屋敷の入手と彼らの養育とを約束したということであった。

一方、青木は、斎藤が井上に相談したその夜、まだ井上の屋敷にいた斎藤を訪ね、彼の外国行きの計画に諸手を挙げて賛成している。その時の様子は斎藤の次のような描写から分かる。

「……庭口から靴の音がして、木影の闇より人の影が此方へ近づく。誰と見ると青木次官、ホロホロ涙を溢しながら這入つて来り、マア、斎藤、宜かた哩、大層心配をした。と其れより両人にて種々物語りの末、青木次官の云ふ、如何ぢや、お前一つ欧州漫遊と洒落ては如何か、此の際此れが一番得策ぢやと此の青木は思ふが、……」[36a]

と青木は斎藤にヨーロッパ行きを勧めたという。斎藤が、しばらくぶりに外国に行きたいと同意すると、青木はさらに次のように言う。

「拙者もお身の一身を心痛し、彼方此方奔走の結果お身を獄屋の人とせずとも先づ宜ろしいやうなことのなつたやうだから……畢境は此の場で立派に名目が立てば事穏便に落着するので、その欧州行は拙者至極賛成ぢや」

と、斎藤が逮捕されずに済ませたこと、辞任し、できれば国外に出ればなおよいだろうとの判断を示した。

これに対して斎藤は、

「私は別に何等の御注文も御座ひません、唯お指図に従ひませう」

と決意のほどを示し、すべての役職から退いたのである。斎藤は、こうして事件から一週間も経たないうちに追い立てられるようにして、

「公使館参事官に任す、年俸千七百円を給ふ、御用有之欧米各国へ被差遣云々の辞令を貰つて」無任所公使館員としてアメリカを経由してヨーロッパに赴いた。そしてドイツ公使館滞在中の一八八八年六月にブダペシュトにいるヴァームベーリに手紙を書いたのである。

以上が、斎藤がヴァームベーリに接触するまでのいきさつである。もとより客観的な資料不足のため、私自身斎藤の自伝に頼り過ぎたきらいがないでもないが、結局この「機密漏洩事件」なるものは、斎藤に爪腹を切らせることによって、一件落着したことは確かである。その後条約改正会議は書記局の長官に「都合により職を罷めた」斎藤に代わって都築馨六を選び、一八八八年、井上自身によって無期延期が宣せられるまで、続けられた。

上述のように事件について誰も語っていないのでその内実は謎に包まれたままである。[37] いずれにせよ斎藤が井上の身代わりになったことは当時すでに外務省内部では周知の事実であったのであろう。その点は斎藤の生涯の友人であった原敬の『原敬日記』からも窺い知れる。すなわち当時フランスの公使館にいた原は一八八六年一一月四日の日記にこう記していることからも分かる。

「井上外相秘書官斎藤修一郎より米国発の書状を落手せり。急御用にして欧州に赴く旨申越ありたるが、実は条約改正案世間に漏洩したるに因り、外相に代り責任を負うて海外に避けたるなり。[38]」

（六）人生の幕引き

斎藤が、当時の日本外交にとって最も重要な条約改正問題から身を引いて、国外に脱出したこの時、まだ三一才で、外務省官僚として出世の階段を登りはじめたばかりの時期であった。彼は深い挫折感を味わったと思われるが、いったん井上の前で「丸裸体で亜米利加に稼ぎに行きたい」と希望を述べながら、青木に説得される形で「官遊」したのは、まだ外交畑で自分の出番があると考えていたからに違いない。彼は「二年間の歳月を毎月二百五十円づつの定給にて各地を放浪し、学問をするでもなければ、別に此といふ官用のあるでもなく、無為にして日を過ごしていた。[39]」と言いながら、「無為」を決め込んでいたわけではなく、外交官として国際情勢の理解を深めようとしていたのであろう。事実ヴァームベーリ宛の斎藤の手紙にはその間の彼の勉強振りがよく表われている。

だが彼は外交畑に二度ともどれなかった。条約改正に失敗したために外務大臣を辞任し、今は農商務大臣になった井上が、斎藤を呼び戻し、農商務大臣秘書官として再び自分の下で働かせようとしたからで

ある。斎藤は井上の「旧年の恩愛」や「情誼に厚き」ことに感謝しつつも、気が進まず、帰国を渋っていた。[40] どうせなら外務省に戻りたかったからである。彼はその時生じた外務省への思いをこう語っている。

「愈々我れ修一郎外務省と訣別するに至らば嗟呼我れは木より落ちたる猿にも等し、浩嘆すべき哉、万事休みぬ、…帰朝以来農商務省にあること数年、然れども余は外務省を去ると等しく余が生涯は終りを告げたるものにして、只其骸骨のみ世の中に行吟ふて居るのであつて、四肢なき木偶と選ぶ所なく……」[41]

このように外交を天職を考えていたらしい斎藤は、帰国前にかなり熱心に外務省へ戻る運動をしたようだが、結局は時の外務大臣大隈重信に強く説得されて、外務省行きを断念した。彼は農商務大臣秘書官兼商工局長として当時商工業界の再編成にとって極めて重大な、いわゆる「取引所問題」[42]の解決に尽力し、一八九三年三月には農商務次官になった。だが、同年の帝国議会に農商務大臣後藤象次郎、次官斎藤、衆議院議長星亨に対し、取引所に関する「官紀振粛問題」が起こった。[43] それは農商務省汚職事件として世情を賑わしたのだが、斎藤はその責任をとって辞表を提出した。この際にも、今後の身の振り方について相談した井上に、このまま農商務省に残るように言われたにもかかわらず、斎藤は「予が将来の立脚地をも考へて見ると、未練ながら外務省へ転任を希望した」[44]のである。

ところで井上は、斎藤が「官紀を紊乱して居らぬ」[45]という立場であったから、斎藤に辞任を撤回するように説き、斎藤もいったんは辞表を撤回したが、同年一二月二四日に「官紀振粛の勅語」が出され、その中で、

「……農商務省の職司たる、その人民に接するに於いて、最も慎重を加うべきは論を竢たず。朕は、その主務大臣が特に僚属の飭励に努力せんことを欲す。……」[46]

と述べられるに及んで、翌一八九四年一月一〇日に農商務次官を依願退職したのである[47]（後藤農商務大臣の辞任は一月二二日）。

漏洩事件と汚職問題という内閣の存立をも左右し兼ねない二つの大きな事件に関わった斎藤は、こうして官界を去った。官界にいた時代に作り上げた人脈によって彼は、同年一二月に韓国政府農商務顧問になったり、内国鉄道会社取締役を歴任したり、商況社業務担当社員となってアメリカへの渡航移民業務に従事した後に、一九〇一年頃東京米国取引所理事長になった。また彼は青年時代の初期の夢であった新聞界に入り、中外商業新報社長を勤め、新聞を発行した。さらに佐々友房らと一八九九年七月五日の帝国党の創立に関わったのである。[48] だがそれらすべては斎藤にとって全身を傾ける程のものではなく、その間当時の金で二二万円という莫大な借金を抱えてしまっていた。[49] 彼は一九〇七年、とくに目的もなくアメリカに渡り、サンフランシスコに滞在して、やがて日本人学生会といった団体の「監督」のようなことをして、日本人社会のボス的存在であったようである。[50] その当時の斎藤の様子を、世界一周の旅行の途中でアメリカを訪れていた親友の原が日記に次のように記している。

「……斎藤並に同人の世話をなし居る数名昨日も今夕も来訪、斎藤当地にて学会の世話などなし居るも、当地にては到底見込みなきにより東方に赴くに決せりと云ふに付き、旅費中に百弗を贈与せり、誠に気の毒の事なり。[51]」（一九〇八年九月一一日）

原は、かつて新聞記者をしていたときに、斎藤から井上を紹介され、外務省に入り、また農商務大臣秘書官の斎藤の推薦があったればこそ、大隈に嫌われていたにもかかわらず、農商務省官房秘書官の席に就くことができたのである。今や政友会のトップとしてまた政界のリーダーとしての道をまっしぐらに歩む原の姿を斎藤はどのように見ていたのであろうか。

斎藤が、サンフランシスコで原にあった時分、かなり生活に困っていた様子は、当地の新聞記者で斎藤の書生のようなことをしていた大塚善太郎によっても記されている。

「……先生の桑港に在るや、殆ど失意の極に達して居た、一見それが

分る位だから……」[52]と。

彼は、一九〇九年暮に帰国したが、特別に仕事の当てもなく、上述の大塚に、農商務省にかけあってどうやら特許事務所とは名ばかりの「俗事談判引受所」のようなものを作るという、相談を持ち掛けている程であった。[53]その半年後の一九一〇年五月七日、斎藤は東京麻布笄町の自宅で腎臓病のために波乱に富んだ生涯を閉じた。享年五六才であった。[54]

（七）おわりに

斎藤修一郎の生涯をたどる作業は、ヴァームベーリと牧野伸顕の関係を調査する過程で生まれた、いわば副産物に過ぎない。斎藤の生涯を素描することで、何ゆえブダペシュトの文書館にヴァームベーリ宛の手紙があったのかは、理解された。だが本稿では残念ながら、斎藤とヴァームベーリを結ぶ思想的な一致点も容易には見つけ出せなかった。[55]従ってそこでは日清・日露戦争に至る過程において日本人外交官ならば等しく有しているロシアの朝鮮半島への進出、満洲（中国東北部）経営に対する警戒心、ロシアに関するより正確な情報の収集意欲が斎藤をしてヴァームベーリに接近させたという、一般的な結論しか導き出されなかった。斎藤が国民協会の対外硬運動を基礎にもち、国体擁護・軍備の拡充を政綱に掲げる帝国党の創設に参画したという点から、彼の思想傾向を速断することは危険ですらあるかもしれない。

だがこれまで見てきたように、斎藤が外務省官僚であることに固執し、「汚職事件」の後にも外交官として再び外国行を希望している点から考えてみると、一八八六年からの彼の二年間の「官遊」が一体どのようなものであったのか、またその間どのような情報を日本に送っていたのか、の解明こそが斎藤とヴァームベーリを結び付けて考える上で重要になるであろう。その点についてはいずれ稿を改めて論じなければならない。

（八）付録―斎藤からヴァームベーリに宛てた手紙

（その一）

「ベンドラー通り、二〇の二　　ベルリン、一八八八年六月四日

ブダペスト大学教授アルミニウス・ヴァムベリ様

拝啓

貴方様にとって全く未知の人物であります私が止むに止まれずお手紙を差し上げます理由や動機を述べますことは不要であると考えます。ただ私は貴方様が中央アジアの問題に関しまして偉大な権威であり、一方私は貴方様が関心を抱いております問題の常に緊急の側面に無関心ではいられない日本人であると申しておきましょう。

ロシアの征服欲はヘラート[56]やコンスタンチノープルに対してと同じくらい満洲や黄海に対して精力的に向けられております。そして中国の軍事力の脆弱な状態を考えますと、満洲全土の征服ばかりかこの帝国の国土分割自体はヘラートを占領するよりも容易な仕事のように思われます。もし万が一ロシアがその気になりさえすればですが。しかしながら、ロシアはその気にならないと誰が申せましょうか。たとえ全くその気がなくとも、シベリア横断鉄道の断固とした敷設計画は将来の結末に重苦しい影を投げかけます。

こうした状況におきまして、私はこの問題につきましてあらゆる有益な情報を得たいと心から願っております。従いまして私は貴方様の『来るべきインドの闘争』[57]、ブルガール氏の『中央アジア問題』、ジェームス氏の『長く、白い山』や『アジア・クォータリー・レヴュー』のシリーズなどを読みます一方で、私は古い新しいは問わず入手可能などんな情報でももっと集めたく存じます。

以上申し上げて、そこでこの目的のために貴方様に援助をお願いす

るのが最良の策であると考えました。
もし宜しければ、なにとぞこの手紙に関心を寄せて下さり、私が貴方様に非常に恩義を受けていると感じますような貴重な情報を得られますようお願い申し上げます。
最後に、英語またはフランス語で書かれましたどのような書物も小冊子も等しく歓迎しておりますことを付け加えさせていただきます。
貴方様の全く忠実な卑しいしもべ
斎藤修一郎」

（その二）
「ベンドラー通り二〇の二　ベルリン、一八八八年六月一三日
ブダペスト大学教授A・ヴァムベーリ様
拝啓
貴方様が私の手紙に答えてくれました機敏さと親切な表現には、感謝に耐えません。私はただちにロンドンのエージェントに貴方様が私に推薦して下さった書物を送ってくれるように依頼しました。そして私はそれらを非常に喜んで研究するつもりでおります。
私は貴方様が私の国が『二つの手強いライヴァルの来るべき闘争で重要な役割を演ずることを求められている』と考えておられることを知り、幸せであります。征服あるいは占領といった欲求は別にして自己防衛のために来るべき諸事件に日本が参加せざるを得ないと思います。少なくともそれは私の意見であります。……
なにとぞ私の心からの感謝をお受取り下さい。そして引き続き手紙を差し上げます喜びを私にお与えますことをお約束下さい。
敬具
斎藤修一郎」

［註］

(1) 日本で知られているヴァームベーリの著作を一点だけ挙げておこう。小林高四郎・杉本正年訳『ペルシア放浪記―托鉢僧に身をやつして』（東洋文庫四二）平凡社、一九六五年。「アールミン・ヴァームベーリ」という表記について。彼の母語であるハンガリー語ではヴァームベーリ（姓）・アールミン（名）Vámbéry Ármin の語順。英語での表記はArminius Vambéryである。

(2) ドイツ語版の書名はDie gelbe Gefahr (1904, Budapest) である。

(3) 「牧野伸顕と日露戦争（一）――彼の反黄禍論活動を中心に――」『群馬県立女子大学紀要』第八号、一九八八年三月、七一―八四頁および「牧野伸顕と日露戦争（二）――オーストリアの新聞から見た戦争世論――」同上、第一〇号、一九九〇年三月、三三―四七頁。

(4) ヴァームベーリは上述の『黄禍』の中でベルリン在住の斎藤修一郎が手紙をくれたことを明らかにし、その内容の一部を紹介している。なおそこでは修一郎を「Shinichiro」と誤記している。斎藤が誤解されやすい署名をしていたためである。
「… Im Jahre 1888 schreibt mir der damals in Berlin studierende Japaner Herr Saito Shinichiro : …（一八八八年に当時ベルリン在住の学生斎藤シンイチロウ氏が私にこう書いて寄越した。…）」、op. cit., p. 5.

(5) 「『反露主義者』アールミン・ヴァームベーリ」山本俊朗編『スラヴ世界とその周辺―歴史論集―』ナウカ、一九九二年、三四一―三七七頁。

(6) 斎藤の生涯を記述するため参照した資料・文献類は次の通りである。まず、彼の自伝とも云うべき『懐旧談』が基本的資料として挙げられる［これについては注(8)で詳しく触れる］。次いで人名事典（辞典）・記録では『明治人名辞典』II、下巻、日本図書センター、一九八八年（底本、日本現今人名辞典発行所、編・刊『日本現今人名辞典』一九〇〇年）、大植四朗編『明治過去帳―物故人名辞典―』東京美術［一九三〇年（原著私家版）］一九七一年（新訂初版）、井尻常吉編『歴代顕官録』明治百年史叢書、原書房、一九六七年、郷土史では一八九〇（明治二三）年創刊の『武生郷友会誌』を初め、南条郡教育委員会編『福井県南条郡誌』一九三四年、武生市史編纂

委員会編『武生市史』第三巻（資料編、人物・系譜・金石文）一九六四―七六年、和田節三著『武生郷友会五十年史』三秀舎、一九三七年、百年史編纂委員会編『武生郷友会百年史』一九八八年、および神門酔生著『土生［滝］人脈譜』武生、一九七四年、がある。神門氏は斎藤の数少ない親戚筋に当たる歴史家・作家で、一九九二年に私が調査のために武生市を訪れた際、斎藤家に関する様々な貴重なお話をしてくださった。氏の上述の著作は、斎藤家を含む一門全体を把握する際の貴重な資料である。斎藤の親戚筋と言えば、日本近代皮膚科学の確立者として、また梅毒史研究の第一人者、性病予防の啓蒙家としても知られた東大医学部教授、土肥慶蔵（一八六六―一九三一）を忘れることはできない。彼の著書『鶚軒遊戯』改造社、一九二七年、には「故郷の先哲―栗塚先生と斎藤先生、私と斎藤先生」の章がある。さらに斎藤の友人小村寿太郎の伝記には当然のことながら斎藤に関することが散見される。黒木勇吉著『小村寿太郎』国書研究社、一九四一年、同『小村寿太郎』講談社、一九六八年、信夫淳平著『小村寿太郎』新潮社、一九四二年、外務省編『小村外交史』明治百年叢書、原書房、一九六六年。斎藤の親友であった原敬の伝記・日記・文書にも斎藤に触れているものが多い。前田蓮山著『原敬伝』二巻、高山書院、一九四三年、同『原敬』時事評論社、一九五八年、もあるが、なにより重要なのは原奎一郎編『原敬日記』［新版］六巻、福村出版、一九六八年―六七年、と原敬文書研究会編『原敬関係文書』一〇巻、日本放送出版協会、一九八四―八九年、である。また斎藤の上司であり、恩師的存在でもあった井上馨の伝記も貴重である。井上馨侯伝記編纂会編『世外井上公伝』三巻、明治百年史叢書、原書房、一九六八年。その他、新聞記事に関しては、中山泰昌編『新聞集成、明治編年史』一九八二年、明治ニュース事典編纂委員会編『明治ニュース事典』毎日コミュニケーションズ出版部、一九八五年などを参照した。

（7）前述の神門氏より原本を見せて頂いた。紙面を借りて深く感謝したい。

（8）『懐旧談』について。一九〇四年に再度アメリカに渡った斎藤は、「児輩の為めに我が五〇年間の戦闘の経緯を物語、此れを故国への置土産とし、児輩の記憶の中に存せしめて、父が失敗と成功との歴史に鑑みることもあれば、世に処するの道を学ぶその一助ともなり、家を興し、親の名を揚ぐる奨励ともならうと思ふのである。……」との意図で当初サンフランシスコの日本語新聞に連載したのを、サンフランシスコ在住の鷲津文三が編集・出版したものである。これは、その後一九一七年七月に『武生郷友会誌』（特別号）に転載された。斎藤の祖先から始まるこの回想録は、農商務省に入る三〇才半ばまでほぼ終っている。その後は彼にとって「落魄失意の時代」で多くを語りたくなかったからであろう。だがこの回想録は、日本の政治・外交を一個人が動かしていたように錯覚させる大臣クラスの多くの回想録とは異なり、実際に外交・内務を現場で扱い、それ故政治の舞台裏を熟知しており、事が起これば犠牲を強いられることになる実務担当者の記録として貴重である。

なお以下の本文で『懐旧談』を引用する際は、単に「自伝」とする。

（9）この武生に関する記述に当たっては、特に『武生郷友会百年史』一五―一六頁を参考にした。なお引用は一五頁より。

（10）大学南校について。前掲、『小村外交史』によると、一八七〇年に大学南校に、貢進生制度が生まれ、「全国の大小藩から学力品行の優秀な学生を貢進生として入校せしめ、これに文明の新教育を授けて国家有為の人材を養成せんとの趣旨に出たもので、これに依り三百二十余名の貢進生を全国より得た。後年名を成した当時の主な貢進生中には、小村の外に、田尻稲次郎、園田孝吉、木下小吉郎（後に広次）、石本新六、古市造次（後に公威）、斎藤修一郎、入江次郎（後に穂積陳重）、杉浦重剛、原口要、河上謹一、伊藤修二、高平小五郎、三浦（後に鳩山）和夫、高橋健三などがある。……」（傍点は引用者）一二―一三頁。

（11）「開成学校開業式の天覧科目」（一八七三年一〇月『新聞雑誌』）前掲、『明治ニュース事典』第一巻、九九頁。なお新設の開成学校は法学部、理化学部、鉱山学部、諸芸学部に分れていた。その時新制法学部に入ったものは、小村、鳩山、菊池（武夫）、斎藤、穂積等九名であった。黒木、講談社版、前掲書、三八頁。

（12）「海外留学運動」に関しては、『懐旧談』六二―六八頁、前掲、『小

村外交史』一七―一九頁、黒木、前掲書、五二―五三頁、伊藤痴遊「傑人斎藤修一郎」『伊藤痴遊全集』（続）第四巻、一九三〇年、二〇六―二一〇頁。

(13) 留学生合計一一名の内、法学部からは鳩山（コロンビア大学）、小村（ハーヴァード大学）、菊池（ボストン大学）、斎藤（ボストン大学）が選ばれた。前掲、『小村外交史』一九頁。

(14) 『懐旧談』七一頁。

(15) 鳩山が外務省権大書記官に任命され、取調局長になった経緯については、同右、六九―七〇頁。また斎藤が小村の外務省入りに尽力した点については、前掲、『小村外交史』三〇頁。黒木、前掲書、六七頁。

(16) 斎藤の人格に関しては、斎藤を恩人・偉人と考えている「蚤坊」なるペンネームをもつ人物が興味深い分析を行っている。「蚤坊」は斎藤を、正直者、親切者、忠義者（セオドア・ローズベルトは斎藤を「忠義武士」と呼んでいたという）、意気者、一徹者、「大才者」、豪放、凡人式ではなく、偉人式であり、男女別なく誰からも「恋られぬ訳がなく」、「重用せぬ訳がなく」、「此気前で担がれぬ訳がない」と述べている。だが「蚤坊」は斎藤がこうした成功者の資質はそのまま失敗者の資質と表裏一体となっていることを指摘して次のように言う。すなわち「此気前で貧乏せぬ訳がない」し「此気前で失敗せぬ訳がない」と。さらに斎藤の「失敗」の原因を「蚤坊」はこう分析する。「先生は時代の寵児でトントン拍子で上進せられた結果として、又夫れ自己の優れたる才と知とが手伝つて、物事が容易に見え過ぎたのであらう。」と。そして彼は斎藤の性格上の欠点を次のようにまとめている。「考慮が少しく足りなかった様である。又一生の大予算が無かつた様である。……」「寄書」（ニューカレドニア、一九二五年一月二二日付）『武生郷友会誌』第四七号、一九二五年、五四―六六頁。また土肥慶蔵は一九二五年一一月に郷友会大会で開かれた「斎藤先生追薦会」で斎藤を回顧し、次のように述べている。「斎藤先生が天下の逸材たりしことは、敵も見方も等しく承認する所であつた。若し先生に対して今少しく自重して修養の功を積み、徒らに気を負ひ才を恃んで功名を急がれなんだならば、将来国家が先生を重用する時節は幾たびも到来したであらう。吾輩は原氏や小村侯などの勲功を思ふ毎に、嘗て其の先輩たり、推挙者たり、而も其力量に於て優るとも劣らざりし先生の末路に対して、痛恨の涙を禁じ得ない。」、土肥、前掲書、二三二頁。なおこの土肥の発言の一部は『武生郷友会誌』第四七号、五三頁に掲載されている。

(17) 『懐旧談』七四―七六頁。

(18) 同右、七六―七七頁。

(19) 「井上伯の知遇を辱うし、先づ権少書記官で出仕した以来、二年ばかりの間に権大書記官とまで昇進し、当時謀は皆用ひられ、言悉く容れらるるといふ有様、実に井上伯の信用を一身に負ひ、所謂世運の寵児であった。」、同右、六九頁。

(20) 「蚤坊」の次のような発言を参照。「而かも当人は正直者で、封建気質の悲さに老伯の旧恩を思ひ、徒に老伯百年の後を持ちつつ落魄中に病を得て遷化せられた。」、前掲、『武生郷友会誌』第四七号、五五頁。また「汝等の母上様（斎藤の妻―引用者）と共に内外公私一心不乱に御奉公に誠を尽した時であった。……」という発言も参照のこと。『懐旧談』七八頁。

(21) 壬午事変については、次の記述に従った。安岡昭男「明治前半期における井上馨の東亜外交政略」『法政史学』第一七号、一九六四年三月、一九―二〇頁。さらに大山梓『日本外交史話』鳳書房、一九八九年、特にその中の「壬午事変と花房公使」九〇―九九頁。

(22) 伊藤痴遊、前掲書、二一六―二一八頁。

(23) 『懐旧談』、七八頁。

(24) 前掲、『世外井上公伝』第三巻、八二九―八三〇頁。

(25) 同右、八二九頁。

(26) 前掲、『明治ニュース事典』第三巻、三八三頁。

(27) この会議の議事録については次を参照。外務省調査局監修・日本学術振興会編集『条約改正関係・日本外交文書別冊、会議録』日本国際連合協会、一九四八年、同『条約改正関係・日本外交文書別冊、条約改正経過概要』同、一九五〇年。これについては次の研究も参照のこと。山本茂著『条約改正』高山書院、一九四三年、鹿島平和研究所編（鹿島守之助著）『日本外交史―条約改正問題』第二巻、鹿

島研究所出版会、一九七〇年、稲生典太郎著『条約改正の歴史的展開』小峯書房、一九七六年。さらに『懐旧談』八一―八二頁をも参照。

(28) 八月二八日の『タイムズ』の記事「日本における条約交渉（Treaty Negotiations in Japan）」を書いたのは『タイムズ』の東京特派員パーマー（H. S. Palmar, 1838―1893）である。パーマーが『タイムズ』に載せた記事を丹念に追い、イギリスジャーナリストの日本観をみごとに浮がび上がらせたのは樋口次郎・大山瑞代氏である。両氏編著『条約改正と英国人ジャーナリスト―H. S. パーマーの東京発通信』思文閣、一九八七年、特に九九―一一二頁を参照。

(29) 『懐旧談』八三頁。

(30) 前掲、『条約改正関係…別冊会議六』四六九頁。

(31) 『懐旧談』八二―八三頁。

(32) 前掲、『条約改正関係…別冊会議六』四七三―四七四頁。

(33) ポットの抗議に対して井上は、こう答えている。「右新聞の文を見たり必ず何か粗漏の事ありたるは判然なり……右粗漏の原因を発見する為め既に詮議中なり」、同右、四七四頁。

(34) 『東京日日新聞』一〇月二二日を参照。あわせて前掲、『条約改正と英国人ジャーナリスト』一一三―一一四頁を参照のこと。

(35) 新聞は「機密漏洩事件」の犯人探しに躍起になったに違いない。その犯人は「給仕」であるとの記事がでた。「外務省にて取扱はるる事務は、外交秘密に渉ること多きが故に、其辺の取締には同省に於ても兼て最も注意を加へ居らるる処、近来往々秘密の漏洩することあるにより、いっそうその取締りを厳重にし、かつ密かに捜索をとげられたるに、秘書官付の給仕に疑わしき者一名ありし由にて、昨日その者は警視庁へ拘引されたりと聞き及べり。」（一〇月二五日付『東京日日新聞』）、前掲、『新聞集成……』第六巻、三四四頁。

(36) 『懐旧談』八四頁。

(36a) 同右、八四―八五頁。

(37) この「事件」に関しては、『青木周蔵自伝』（坂根義久校注）（東洋文庫）一六八、平凡社、一九七〇年、にも坂根義久著『明治外交と青木周蔵』刀水書房、一九八六年にも触れられていない。もはや条約改正史の一エピソードに過ぎなくなったのであろうか。

(38) 前掲、『原敬日記』第一巻、九八頁。

(39) 『懐旧談』八六頁。

(40) 同右。

(41) 同右、八七頁。

(42) 「取引所問題」についてはここで詳しく論ずる余裕がないが、斎藤がいかにこの問題の解決に尽力したかは「懐旧談拾遺―明治二六年の官紀振粛問題・金時計事件の真相」を参照。『懐旧談』、特に一〇一―一〇四頁。また鈴木武史著『星亨』中公新書、八六九、一九八八年、七―九頁をも参照。

(43) 「官紀振粛問題」を解決すべくこの年の一二月二日、国民協会の決議に基づき、官紀振粛上奏案なるものが衆議院に提出された。これに対して、例えば福沢諭吉は、「我輩も上奏者と共に世の風俗の厳粛ならんことを祈る者なれども、この種の道徳問題は帝国議会の本領に於いて議論すべき性質のものなるや否や」と述べて、上奏行為の欺瞞性を批判している（一二月五日付、『時事新聞』）、前掲、『明治ニュース事典』第五巻、一〇一―一〇二頁。

(44) 『懐旧談』一〇八頁。

(45) 同右。

(46) 前掲、『明治ニュース事典』同、一〇二頁。

(47) 「官紀振粛問題」で農商務省内が混乱している様子を新聞はこう伝えている。「一度衆議院の議場に現われたる官紀振粛問題は、国務大臣の辞表となり、ついに発して勅語となり、ために農商務次官は既にその職を去りしが、ひとり次官の免官のみに止どまらず、進んで大臣の位地にも波及し、このほどより同省内の官吏は執務の暇さえなく、しきりにこの事のために奔走し居りしも、昨今は進退分目の場合に切迫したれば、或いは近日国務大臣に更迭をみるべし。」（一八九四年一月一三日付『時事新聞』）、前掲、『明治ニュース事典』同、六六七頁。

(48) 斎藤が帝国党の結成に参画している様子は、同右、第六巻、四九四頁を参照。なお帝国党に関しては、村瀬信一「帝国党ノート」『日本歴史』一九九一年七月号、五三―六七頁を参照のこと。

(49) 前掲、「蚤坊」の「寄書」四七頁。

(50) 大塚善太郎「斎藤先生言行録」、『愛国主義』（付録）第二三号、一九一三年一月、六頁。後にこの記事は『懐旧談』に付録として採録。これは斎藤が語りたがらなかった晩年のサンフランシスコにおける彼の行動を知る上で貴重である。

(51) 前掲、『原敬日記』三一八頁。

(52) 前掲、「斎藤先生言行録」二九頁。

(53) 同右、二九―三〇頁。そこでは斎藤としては珍しく弱気であった。「乃公も到頭食ふに困つてきた、弁護士の免許は取て置かなかつたし、今更役人にもなれぬ……」と。

(54) 斎藤の葬儀は麻布の長谷寺で盛大に催された。親戚代表としては松本源太郎、土肥慶蔵らが、友人代表としては小村寿太郎、原敬、杉浦重剛らが出席している。『武生郷友会誌』三二号、一九一〇年一二月、一五―二八頁には「本会前副会頭正四位勲三等斎藤修一郎先生の逝去」と題する記事が載り、当日の葬儀の様子と彼の事跡を報告し、『懐旧談』を抄録している。

なお、原は斎藤の死について同年五月九日の日記に次のような感想を記している。

「斎藤修一郎去六日（ママ）午前病死し、本日葬式せり。同人は明治一五年已来の友人にて、先頃桑港にて面会せしは最終の面会なりしが、諸友人種々に世話もやきたるが何分にも百事失敗遂に非常の窮境にて死去せしが、香奠を持寄り夫れにて葬儀を済ませ、残余は先年我々諸友の醵金せし残額に合せて遺族の扶助となすことに決し、浅田徳則、藤田四郎是迄通世話し、夫に親族一両名を加へて世話する事となせしが、未亡人の外に男女七人の子供家に在り、老人も三人斗りも世話し居る様子にて随分困難の次第なり、友人の醵金せし金の残りと香奠の残とを合せば七千円斗りとなる由なるも、男子の出来宜しからず、誠にこまつたものにて且つ甚だ気の毒なり。」、前掲、『原敬日記』第三巻、二三頁。

(55) ただし、土肥慶蔵の次のような回想（武生郷友会『昭和五年秋季大会の食卓上』での発表）は、斎藤の対ロシア観を示しており、ヴァームベーリとの手紙の「成果」を表したものとして興味深い。「…ある時、斎藤先生が丁度西洋から帰朝されて『欧州の現状』について大勢を説かれ『ロシヤという国は最も恐るべき国である。それは中央亜細亜や東亜などに事端を起こして、問題がむずかしくなると、責めを辺境の役人に帰して我関せず焉をきめこむという外交ぶりで、さすがの英国なども手を焼いている』などというお話を耳新しく聴いたものです。……」前掲、『武生郷友会百年史』九四頁。

(56) 現アフガニスタン西部の都市。

(57) 徳富蘇峰も熟読したというこの本の内容については前掲、拙稿「『反露主義者』アールミン・ヴァームベーリ」、三五九―三六六頁を参照。